

私に長男が生まれた時、母はとても喜んで庭に桜の苗木を植えてくれました。

翌年、次男が誕生した時も同じように桜の苗を植えました。

二本の苗木は立派に根付き、三年目に揃って数輪の花をつけ、母を喜ばせました。

子どもの成長と共に、すくすくと育った若木は、やがて美しいピンクの花をだんだんと多く見せてくれるようになりました。

そんな時、少し時期を離れて生まれた長女に「おばあちゃん、私の桜は無いの」と言われ、母は「ごめんね」と困った顔をしていましたが、きつと年をとって、体調を崩し、植えるのが大変だったのでしょう。

母が亡くなって数年後、不思議なことに二本の桜の木の根元から枝分かれするように細かい幹が出て、みるみる伸び、重なって、まるで二人の兄の間で手をつなぐ妹のように可憐な花を咲かせるようになりました。母が地下から長女の桜を押し出してくれたのでしょう。

三本の桜も今では立派な大木になり、見事な花は満開になると、遠目には、さくら色の雲のように見えます。

長女は「きつと、おばあちゃんの心が通じたんだ」と、自分の娘にも話して感謝して眺めています。

私に孫が生まれた時には、残念ながら植える場所が無く、桜を植えることができませんでした。

でも、いつの程か、毎年三本の桜が満開になるころには、結婚して、家を離れた子どもたちも誘い合わせて集まり、お花見の会を開くようになりました。

時には、さくら色のじゅうたんの上で花吹雪をあびながら、亡き祖父母の想い出話をしたり、小さな孫たちは、ピンクの花びらを追って賑やかに遊びます。

母が植えてくれた桜は60年近い年を経ても、家族の絆を温める大切な役割をしていてくれることを、皆で感謝しています。